

—「君がここにいるということ」緒方高司著より—

由香子ちゃんとお会ったのは、彼女が4歳の頃、幼稚園の年長組さんだった。1週間熱が下がらず、かかりつけの小児科医で血液検査をしたところ、白血病の疑いが濃いということで、大学病院に紹介されてきた。

直ちに入院となり、骨髄穿刺という検査をすることになった。4歳の小さな女の子には辛い検査である。

看護師が勇気づけながら検査を受けるよう説得するのだが、由香子ちゃんは泣いて暴れて、嫌がった。あまりにも激しい拒否反応だったため、お母さんに部屋に入ってきてもらった。お母さんは、泣きじゃくる由香子ちゃんを抱きしめ、彼女の耳元で何かをつぶやいていた。お母さんの言葉にじよじよに泣きやんでいった。鼻水をすすりながらも、うんうんとうなずいていた。

お母さんは医師のほうに向き直って、言った。

「先生にお願いがあります。由香子にする骨髄穿刺検査を私にもしてください。そして、私がその検査をがんばる姿を見たら、由香子も検査をがんばる、と約束させました。お願いします」

医師らは言葉を失った。このような申し出をした親は、初めてであった。

「私も、由香子と一緒に、病気と闘いたいです。そのためには、由香子が引き受けなければならない痛みや辛さを私もできるだけ共有したいのです。気持ちだけでなく、五感すべてを使って、共有したいのです。」

「いや、お母さん。それは無理です。病気でない人に針を刺すということは、治療行為ではないので、傷害罪になるのです。違法行為になります」と医師は困惑しながら答えた。

「それはわかります。でも、針を刺される側の私が納得しているのです。先生方に迷惑をかけることは絶対にありません。ですから、お願いします。そうすれば、由香子も検査をがんばると言っているんです」

今度はお母さんを説得しなければならない状態になった。お母さんは静かに、しかし毅然と言った。

「私はこの病院に来るまでに、いろいろ考えて、決心したのです。由香子が苦しくてご飯を食べられないときは、私も食べません。由香子が足を切らなければならないときは、私も足を切り落とします。そして、神様に由香子を助けてもらうのです。神様に頼んで、私の寿命を由香子に分け与えてもらうのです」

その部屋にいたみんなが黙り込んだそのとき、由香子ちゃんが叫んだ。

「ママ、大丈夫だよ！ 由香子、検査がんばるよ！ ひとりでがんばれるよ！ ママはしなくていいよ」

主治医が由香子ちゃんの手を取り、こう言った。

「由香子ちゃん、先生も一緒にがんばるよ。そして、必ず由香子ちゃんを治す。約束するよ。」

由香子ちゃんの最初の抗がん剤治療が終わった。正常細胞の回復が最初の予想より悪かったが、なんとか順調に治療は進んでいった。

3年後、順調だったと思われていた由香子ちゃんの白血病が再発した。由香子ちゃんは7歳になっていた。再び入院してきた彼女はさぞ気落ちしているかと思っていたら、相変わらず明るくて楽しい子であった。私は、由香子ちゃんに聞いてみた。

「由香子ちゃんは前にお医者さんになりたいって言ってたの、覚える？ 今もお医者さんになりたい？」

「うん。でもそのためには、いっぱい勉強しなきゃいけないって、ママが言ってた。」

「がんばり屋の由香子ちゃんなら、大丈夫だよ。お医者さんになってほしいよ。でも、病気になったせいで学校を休まなきゃいけないから、みんなと一緒に勉強できなくて残念だよね」

「私がお医者さんになりたいって思ったのは、私が病気になって入院したからなの。病気になるなかったら、お勉強しようって思わなかったら、病気になってよかったのかもね」

7歳の女の子とは思えない肯定的な言葉に、私は驚いた。

神様、どうか彼女の夢がかないますように。私は祈った。そして、何か不吉で禍々しい予感が立ち上がってくるのを必死で振り払った。

再度の抗がん剤治療も、治療開始当初は効果があったように思えたが、時間が経つと再び白血病細胞が増殖を繰り返してきて、彼女を治癒させることはできなかった。その当時、ようやく比較的タイプが似た骨髄が見つかっていたため、医師と家族が話し合った結果、成功する確率は五分五分だが骨髄移植に懸けてみよう、という結論になった。

その年の10月、由香子ちゃんは骨髄移植のために入院してきた。由香子ちゃんは9歳、小学校3年生になっていた。骨髄移植の準備が始まったら、人の出入りが制限される無菌室で長期間過ごさなければならなくなる。無菌室はガラス張りの部屋で、外とはインターホン越しの会話になる。

あるとき無菌室の中の由香子ちゃんは、ガラスの向こう側のお母さんにこう言った。

「ママ、私がいなくなっても、ひな祭りの日には、おひな様を飾ってね」今は10月。ずいぶん先の話である。

「由香子、おかしなこと言わないで！ 来年のひな祭りは、おうちで一緒にひな祭りしましょ！」

「そうだね。でも、ママ。約束だよ」

その後由香子ちゃんは、一度も退院することなく、3カ月後に亡くなった。いったんはもちなおしたかに思えたが、最後は力尽きて天国へ旅立った。9年間の短い命だった。



由香子ちゃんが亡くなってから、お母さんはしばらくは何も手につかない状態だった。由香子ちゃんの物を目にするたびに涙が溢れてくる毎日。お母さんは、そのあまりにも大きすぎる喪失感に阻まれて、一步も前へ進めない日々が続いていた。

その年の3月、お母さんは由香子ちゃんとの約束をふと思い出した。ひな人形を飾ってほしいとの由香子ちゃんの願い。正直、亡くなった我が子のためにひな人形を飾るのは気が重い。しかし、由香子ちゃんとの約束である。お母さんはひな人形を飾るため、人形の入った箱を開けた。箱の中には手紙が入っていた。

パパとママへ

今までありがとう パパとママの子に生まれてこられて、しあわせでした

わたしはいなくなっちゃったけど、しんぱいしないで

このおひなさまみたいに、おおぜいのお友だちにかこまれて楽しくすごしています

だから、悲しまないでね こんど生まれ変わったら、お医者さんになりたいな

そのときは、パパ、ママ わたしを見つけてね